

# ワイナリー

「マッセートのワイナリー」設計=ジートモリ

ブドウ畑の間を掘る ロベルト・ボージ

参照 | 本誌 pp.50-57

「ワインは気質と光の化合物だ」。ガリレオ・ガリレイのものとされるこの言葉は、海面を乱反射する光と大地の生成力との結合を想起させる。つまりワインは、土地の気質と天から射す光の混合物として、錬金術の象徴体系を参照した合成物をなすのだ。ただしそこには、前兆をとらえる直感によって、葡萄の粒という「感嘆すべき実験室」の果汁をワインに変化させる発酵過程の、生物学的な秘訣が集められている。マレンマ・リヴォルネーゼ[カステリオンチェッロ岬の南からコルニオ渓谷までのマレンマ地方北部]のティレニア海に近い丘陵地帯は、背後に聳える森林で北側を保護された豊饒な土地である。テヌータ・ディ・マッセートは同名の丘に横たわる農地で、深い海洋下層から生まれた青粘土が「マッシ」と呼ばれたことから、この名がついた。鮮新世[約500万年前から258万年前までの地質時代]に遡るこの地層が、太古の歴史を物語る。長らく使われていなかった7ヘクタールのテヌータ・ディ・マッセートは、ボルゲリ村からも海岸線からも数キロ離れた斜面に広がる。1980年代に葡萄の木が植えられ、1986年にメルロー種のみでできたマッセート・クリュの初年度が完成した。このワインは長らく世界で最も高価なイタリア・ワインの表彰台に上り続け、毎年3万本が生産され、出荷先は70ヶ国にのぼる。

テヌータは、古くから葡萄栽培に携わるフレスコバルディ家の所有地の一部だ。同家は700年前からトスカーナに定住し、最近は、この地方のさまざまなテロワールの多様性を発展させ評価することに力を注いでいる。マッセートのワイナリーは、森ひかるとマウリツィオ・ジート[2020年4月に急逝]の建築ユニット、ジートモリ建築設計

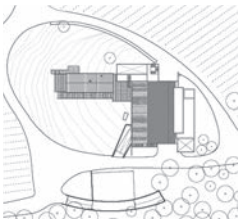


ワイナリー全景:左に既存の農家、右に新築棟を見る

事務所がデザインした。彼らにとって、アヴェッリーノ近郊フェウディ・ディ・サン・グレゴリオのものに次ぐ、2度目のワイナリー設計となる。これは、テヌータをすべて同名のワインの生産に特化するため、所有者の強い希望で実現された。本作は、来訪者のアクセス路——専用の長いスロープで周囲の農地のまばゆい光から空間の深奥へと導く——を、葡萄の搬入路——ここから生産過程が始まり、上階へ、屋外へと進む——と区別する必要性を吟味し、解釈した。このワイナリーは、[ポンプ等を使わない]自然落下製法に合うよう計算され、温湿度調整を決定づける青粘土の自然断熱特性によって保護されている。掘削という引き算を使って構想された建物は、丘陵と周囲の葡萄畑の間に調和よく挿入されている。ほぼ全体が地下に埋められた。延床面積2,530m<sup>2</sup>のうち1,560m<sup>2</sup>は地下階で、外からはほとんど見えず、古い農家の脇と下層に実現された。この農家は斜面から突き出る唯一の

ヴォリュームで、葡萄の木が整然と並ぶ丘を今も見下ろしている。「このワインの製造に必要な苦労を表現するため、建てるのではなく、モノリスのような丘のヴォリュームを穿つことで、一連の空間を創り出そうと決めたのです。ヴォリュームや屋内の天井高の多様さと、複数階にまたがる空間構成は、金の鉱山のような構造を想起させます。貴重な鉱脈を辿って鉱床に至る構造です」と森ひかるは説明する。

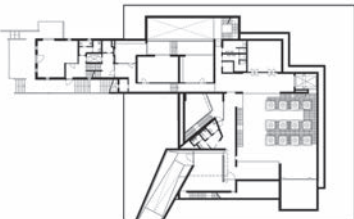
構造は現場打ちした鉄筋コンクリートで実現された。壁面に残された型枠の跡で地層を表現するよう意図されている。軽量のステンレスとガラスを使い、マッシヴなヴォリュームにスリット——この裂け目から床スラブが見える——を入れることによって、建物の重量と周囲からの土圧とを軽くしている。ワイナリーの内部空間は機能的に決定され、生産過程の比較的単純な段階に当たるエリアの連続から始まる。まず収穫した葡萄の搬入、洗



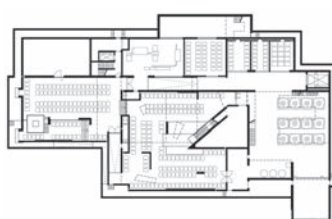
配置図



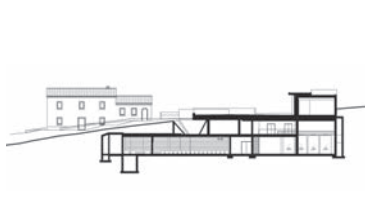
地上階平面図



中間階平面図



地下階平面図



断面図

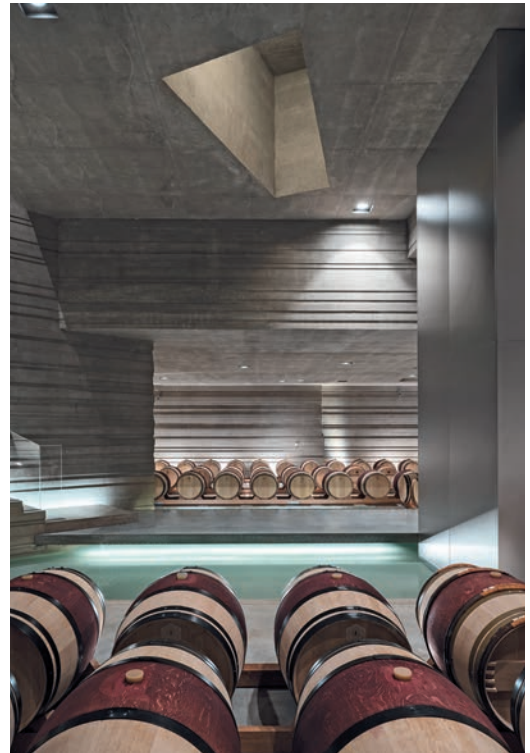
無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。  
©2020 Arnoldo Mondadori Editore  
©2020 Architects Studio Japan



## ワイナリー



中間階より地下階を見る



地下階：人工池とトップライトを見る



中間階：エントランス



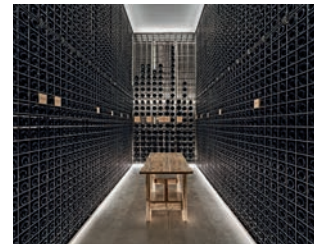
地下階の熟成室



地下階：発酵タンク



地下階：マッセート・カヴォー  
への入口



マッセート・カヴォー

浄、選別から、圧搾と徐梗の工程に続く。これは、葡萄を受け入れるための屋外大広場——地下構造の屋根としても機能する——で行われる。発酵過程は地下階の一室で行い、デリケートな抽出過程に適した容量6,500リットルの発酵タンクが、12個置かれた。タンクのデザインも検討を重ねる設計プロセスから生まれた。つまり、外側は多面的だが、内側はチューリップ形とすることで、[葡萄に衝撃を与えない]特に丁寧な抽出を可能にした。さらに地下階を進んでいくと、精練のための部屋がある。1年目と2年目の木樽(フレンチオーク)熟成のための2室と試験熟成室を設けることで、小規模な醸造と熟成の可能性を広げ、各年度や小地所特有の要請に対応しやすくしている。ここでは、適切な湿度に保つための人工池によって、

海流と土壌の包容力との統合が喚起される。製造過程の仕上げとなる、瓶詰とラベル貼りのエリアも建物に含まれている。

同じ階の、やはり鉄筋コンクリート造の回転扉をくぐると、ワイナリーの心臓部がある。マッセート・カヴォーだ。貴族の館の壁奥に造られたアルコールのように、魅力的で軽いステンレス製ケージに寝かされて、1986年以来の年度ごとに瓶が貯蔵されている。経路の終わりに、暗闇から地上の光の下に戻ると、鉄筋コンクリートの階段で既存農家(マッセート邸)の内部に連絡する。階段の古い外観を保ちつつ復元することで、どの年をとっても貴重な、マッセートのワイン製造の秘訣が詰まった労働の場に、オマージュを捧げている。

作品：マッセートのワイナリー

設計：ジートモリ——森ひかる、マウリツィオ・ジート

協働者：Enrico Prato, Angela Abbruzzese,

Matteo Lonigro, Davide Pasquariello

構造：Maurizio Ghillani | 機械工学・上下水道：Nicola Martinuzzi

電気工学：Y. Demi (MPS Studio Associato)

現場監理：Maurizio Ghillani | 現場監理指揮：ZITOMORI

施工：Target Costruzioni srl | エコロジー設備：Pandolfini srl

鉄筋コンクリート造醸造樽：Nico velo spa

建築主：Ornellaia e Masseto Soc. Agricola srl

規模：延床面積 2,530 m<sup>2</sup>

スケジュール：設計競技 2012年/施工 2016-18年/竣工 2019年

所在地：Bolgheri, Castagneto Carducci (LI), Italy



「ヴィネティック社VVワイナリー」  
設計=ヴィンセント・ヴァン・ドゥイセン・アーキテクト

音響的設計 マッシモ・クルツィ

参照 | 本誌 pp.58-67

剥き出しの簡素さ……比例の整った建物では常にそれが好まれるだろう。

ロバート・モリス『農村建築』、1750年

近年、ものの「デザイン」が世論の関心を方向づけてきた。建築はその足跡をただ追隨するだけで、既存の建築とも敷地ともほとんど関係のない、概して抽象的フォルムを使って、消化しやすいアイコン的オブジェばかり提案してきた。そうするうちに、大規模投資家たちはもはや建築を評価するのではなく、容易に伝達可能で最大限商業化できる「特別なフォルム」を評価するようになった。諸大学はより営業に向いた、建築史との連続性というしがらみから自由なこの「信条」にいち早く宗旨替えした。ヴィネティック社の新たなVVワイナリーのプロジェクトでわれわれが目にしたのは、真正の建物である。それは建築家の経験から培われた能力によって、建築とデザインを正当な関係で結び、双方に同じ目標、つまり良き住まいのための空間を創造するという目標を据えた建築である。

リーゼレの集落は、プールスという小村の周縁部にある。アントワープから南に30km下ったこの地域は、アスパラガス畑の正確な幾何学、葡萄畑の整然とした列、ヤナギとポプラの並木で区切られた農地によって強く特徴づけられた、非常に特異な平野である。プロジェクトの対象地は、ファルケ・フルーフ（逐語訳すれば「鷹の飛翔」）と呼ばれる小川の縁にある。かつてこの地は鷹が多く生息しており、それに因んでワイナリーの名が決められた。本作は野心的なプロジェクトである。このブドウ栽培・ワイン醸造農地は、乾燥した特別な土壌に4.2ヘクタールにわたって17,000本のブドウを栽培できる。非常に冷涼な気候のため、アルコール度数の低い、味・香り・色など五感に訴える価値の高いワインができる。

周囲を特徴づける幾何学形態と内部空間の厳密な直角性が、平面、またそれ以上に断面に手を加えることによって、容積と規模の絶え間ない対位法を奏でている。このことと、ほぼ平坦な土地でフォルムをデザインすること

への基本的な関心とが、プロジェクトの基本的特徴をなす。ここでは敷地に配されたすべてのヴォリュームが空間を囲み、そこに生まれたヒエラルキーがすぐさま来訪者の中に直感的な方向感覚を引き起こす。原初的で基本的なフォルムは、フランドル農村建築の伝統的フォルムを想起させる。つまり、切妻屋根のような大きな鰐広の「帽子」が、広い機能的なヴォリュームに覆いかぶさっている。

この場の主役は「干草小屋」と「塔」で、その4つの巨大なコンクリート造のヴォリュームが、ワイナリーの心臓部である中央中庭を囲んでいる。そこにはファルケ・フルーフの製造・欲待活動がすべて置かれた。これは何もない屋外「広場」で、ヒエラルキーを定め、ワイナリーを有機的に構成する。収穫の時期にはブドウが集められ、またワインの試飲設備が自然環境と結びつく場である。設計案の核心であり、特別な催事もできれば、長い労働の1日が終わり、農民が長い木製ベンチに座って夕日を眺める、安らかな時間も与えてくれる。

デザイナーのダニエル・デ・ベルダーが手がけたベンチも、規模とフォルムの点で「人間の尺度に合わせた」建築である。この家具は、建築とデザインが同じ方向を進むべきであり、そうできることを裏付ける。つまり過去数世紀にわたって行われてきたように、人間的比例によって住居



「干草小屋」:側面ファサード

を形づくる方向だ。記号としても規模——8mの長さを踏まえれば——の点でも強烈なこれらの家具は、屋外の土地の広大さと内部空間の細かな抑揚とをつなぐ要素となる。

デ・ベルダーによる木製のマッシヴなエレメントは、ヴァン・ドゥイセンの建築的ヴォリュームと連携して、来訪者の戸外経験を最大に広げる。また、母屋[塔]の脇にある大きな樫の老木を日没の位置と関係づけることによって、建物の配置を近くのファルケ・フルーフの急流に接続する。緑地のデザインも、ポプラ、柳、桜、ハシバミの木を50本以上植樹するという、単純だが効果的な方法でプロジェ



左に「干草小屋」、右に「塔」を見る

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。  
©2020 Arnoldo Mondadori Editore  
©2020 Architects Studio Japan

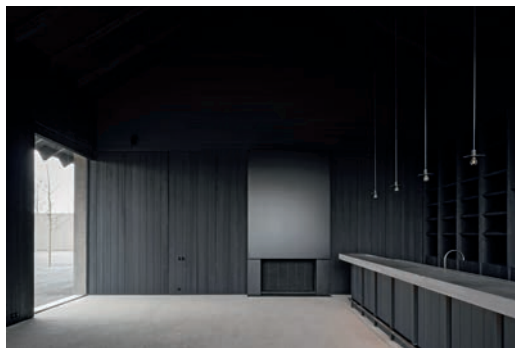
## ワイナリー



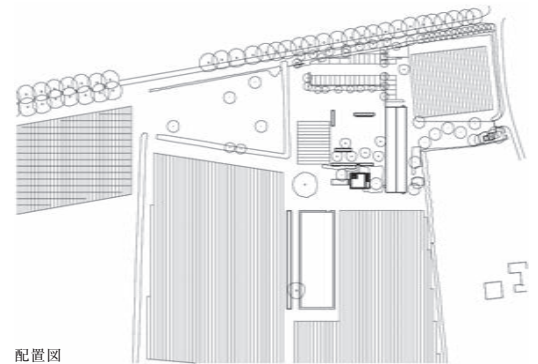
「干草小屋」：正面ファサード



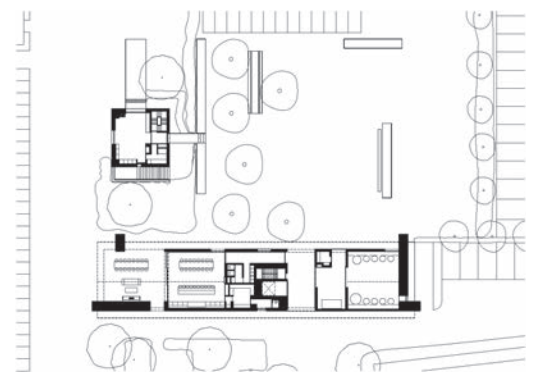
屋外試飲場



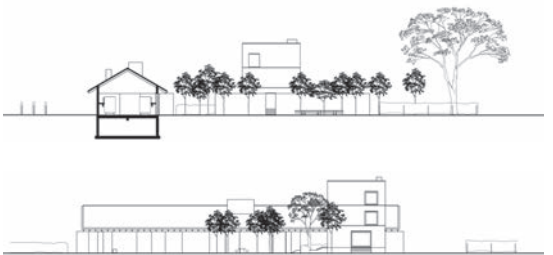
屋内試飲場



配置図



平面図



断面図/立面図

クトに貢献している。開明的な所有者が望んだこの新たな植付けは、新たな農業施設の構成を周囲の自然環境と「縫い合わせる」強い意志の表れである。

いわゆる「テロワール」の色、つまりファルケ・フルーフの土壌が、アクセス路と中央広場を特徴づける柔らかな表層に灰色の溶岩石を選ぶ決め手となった。この要素も物理的にも感覚的にも重要で、踏み固められた農道と農地を覆う柔らかな土との間に、傍目には見えないが、柔軟な境界を生み出す。したがって、2つの素材の間には物質的、色彩的な調和が存在するのであり、それは「テロワール」を唯一無二の基礎的価値とみなすワイン醸造家にとって、この上なく重要な価値を帯びる。本作でも、土壌と建築、屋内と屋外の境界はぼかされ、大きい屋根から

生じる日陰によってのみ推移が決まる。

立地環境に注目する同様のアプローチは、干草小屋のブラインドと塔のある母屋の仕上げに、ヨーロッパ・カラマツの黒い木材を選んだことにも認められる。この黒色は、長期間木造建築を保護するために伝統的にコールタールで塗装された「フランドルの干草小屋」を参照している。黒色によって建築的ヴォリュームと周囲の自然とのコントラストが強く押し出され、それぞれの特徴が際立つ。実施設計のディテール図面からは、正確で、無駄がなく明晰な解を常に追求する建築家の経験値が読み取れる。彼は簡素だが効果的な少数の要素のみで、要求された機能を満たす。

優れた建築において常に起きるように、本作の設計が

生み出す「土壌」、雰囲気、性質は、周囲の土地に力強く明瞭に反響する。それらは同じ強度で、最も小さなディテールにも感じ取れるのだ。

作品：ヴィネティック社 VVワイナリー

設計：ヴィンセント・ヴァンドゥイセン・アーキテクト

構造エンジニア：Paridaens Ingenieurs

建築主：Jan Van Lancker

規模：延床面積 1,520 m<sup>2</sup>

スケジュール：設計・施工 2019-20年

所在地：Liezele, Puurs, Antwerp, Belgium



## 住 宅

「**オエイラスの住宅**」設計=エドゥアルド・ソウト・デ・モウラ

**オエイラスの住宅：夢の解釈** ジョルジェ・フィゲイラ

参照 | 本誌 pp.68-85

[20世紀]

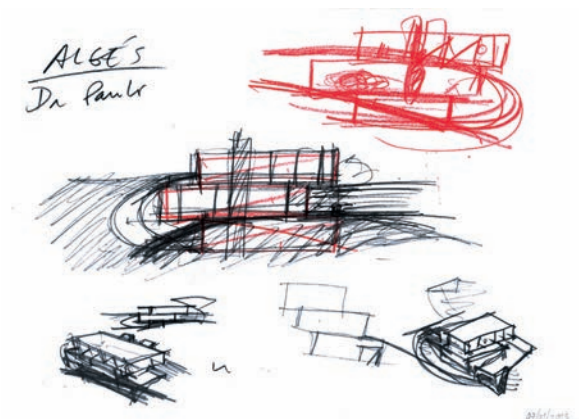
エドゥアルド・ソウト・デ・モウラの建築において、正方形は頻出する形象ではない。これに対して、本稿で取り上げる「オエイラスの住宅」は、矩形平面を持つ——ほとんど挑戦と言ってよい。空気のように軽い立方体は、展望バルコニーの割れ目によって水平方向に、また塔と化した煙突によって垂直方向に圧迫される。ヴォリュームを形づくる曲線は、自動車用エントランスのカーブ——ソウト・デ・モウラが書いているように、土地の傾斜を解決すべくデザインされた——と対置された。さらに、コンクリート造の躯体にはまた別の小さいがはっきりした凹凸が加えられた。

ソウト・デ・モウラの作品では、同様の振幅が容易に認められる。それはバランスを見失うことなく、道を間違えることなく、称賛に値する自制心で実行される。彼が獲得した立ち位置を考えれば、最大限の自由を謳歌できるはずだが、ソウト・デ・モウラの狙いはすべての建築的選択へ

の完全な監督権の維持であり、調和を崩さないという強固な意志に支えられている。

リスボン大都市圏の町オエイラスに建つ住宅は、壁で囲まれた住宅地の一角を占める。3層構造のうち、2層は住居に、半地下はガレージと設備室に充てられた。適正な規模である。小さくも地味でもなく、大きくも過剰でもない。これが「ポルト建築」ならではの特徴であり、適切さ、尺度、デコールムというフェルナンド・ターヴォラの教えの成果である。ソウト・デ・モウラはそれを稀に見る一貫性をもって、自らの行動、文化、社会的信念、そして建築実務を通して明確に実践している。本作はその証拠だ。すでに1970年代末から彼の作品の性格をよく知っているが、第一印象はそれを裏付けている。ただし、オエイラスの住宅の場合、その周囲にあるものをよく見る必要がある。近隣の家々は、目の前に建つ本作の魅惑的で即興的な個性を伝えている。まさしく、そこには建築の特異さを感じさせるものは何もない。近隣の家は「建築的」であることを強制されているのだ。幾何学的になり、近代的で、合理的に意味を帯びる。しかし今語っている住宅は、そうある必要がない。

周知のように、ソウト・デ・モウラはアクロバットを好まな



初期スケッチ

い。彼の身振りは抑制され、例えば、どのように「曲線で線を引くか」、「窓でデザインするか」といった課題によって正当化される。より一般的には、建物を建てることで建築を作るという困難さそのものによって説明される。すべてが容易で潜在的に可能な時代において衝撃的なのは、建築家が「窓をデザインする」あるいは「曲線を引く」難しさを語るのを聴くことが、ほとんど超現実的だからである。ソウト・デ・モウラは直角を研究することによって、この問題に取り組んだ。彼が幾度となく繰り返す「新造形主義」のアプローチは、その欠点ゆえにいつも功を奏し



北東より見る



南東より見る

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。  
©2020 Arnoldo Mondadori Editore  
©2020 Architects Studio Japan